

本当の教えに出会うことは「生きる」ことから、「生かされる」ことへの大転換

無碍の一道 第75号

発行:2019年10月30日
発行者:浄土真宗本願寺派 長尾山 天龍寺
〒739-0147 副住職 天野英昭
東広島市八本松西6丁目10番1号
☎・FAX 082-428-1360

報恩講並びに秋季永代経法座

親鸞聖人のお法りを喜ばせていただきますよう

日時 11月16日(月) 9:00~15:00頃

ご講師 前田 純代 師(広島市西区 善法寺坊守)

朝席 9:00~11:30

お斎(お食事)は、今年^{とき}はコロナの関係で中止させていただきます。

ご理解をいただければありがたいと存じます。

昼席 13:00~15:00

第103回歎異抄輪読会

日時 11月19日(木) 14:00~15:30頃

ご講師 松田正典先生(広島大学名誉教授)

費用 500円

参加者 天龍寺の門信徒の方のみならず、どなたでも参加は自由です。

お知らせ

3月からはじまった石垣修復・駐車場の造営が終了しました。今年は、例年になく梅雨が長かったために、工期が約1ヶ月延びましたが、無事に完成を迎えたことであります。これからお参りをいただきます方々には、ご利用をしていただければありがたいと存じます。

最後に、この度の石垣修復・駐車場造営にご尽力をいただきました平原建設様をはじめご理解・ご協力をいただきました方々には、書面をお借り申し上げ厚く感謝を申し上げます。

本願力に遇いぬれば、むなしくすぐる人ぞなき I

還暦を過ぎ3年が経ちました。どれだけ生きても、人生は楽にならないというのが、私なりの実感です。どこまで生きても楽にならない、自分の思い通りにならない人生を何とか少しでも楽にしようと思ひ通りにしよう、臨終の間際まで、娑婆の縁を去る瞬間まで日々悪戦苦闘しながら生きていくことが、ある意味人として生を受け生きていくことの一部なのかも近頃考えることがあります。

度々申してきましたが、学校を早期退職させていただいて11年が過ぎましたが、幼少期からお世話になった方、大親友の悲しいご縁も含め、どれだけ多くの方々と悲しい別れのご縁をいただてきたかと考えることがあります。

お葬儀の際に拝読させていただきます御文章(本願寺 8 代門主蓮如上人のお手紙)の白骨章の冒頭は、『それ、人間の浮生なる相を・つらつら観ずるに、おおよそはかなきものは・この世の始中終・まぼろしのごとくなる一期なり、……』と言っておられます。ある意味私たちの一生は、まぼろしのごとく過ぎ去っていくものかともこの年になり思うことがあります。

残念ながら長年連れ添った夫婦であろうが、血を分けた親子・兄弟・家族・親族であろうが、はたまた近隣の方、職場の方も含め、すべての人は、限りのある世界に生を受け、生きているが故に、だれもがいつかどこかで、悲しい別れをしなくてはならない宿命の中で、生きている存在であることこの11年間のご縁を通してご指南・ご教授いただいたことでもあります。

また『散る桜、残る桜も散る桜』という句がありますが、残っていてもいつかは散っていかなくてはならないとこの点も11年間のご縁を通して私なりに実感させられたことでもあります。

さらに、この点も度々申してきましたが、私たちは比較の世界に生きているがゆえに、物心ついた頃から雨が降った、晴れが続いた、雪が降ったと自分の都合で良し悪しを繰り返し、一方で勝った・負けた、得した・損した、役に立った・役に立たなかった、調子が良い・調子が悪いと、ただただ目の前のものに一喜一憂・翻弄されながら生きていかなくてはなりません。

時に歎異抄輪読会にて『君はそれでよいのか。今のままでよいのか。』と根源的な問いを投げられ、その時には『はっ』と思ひ、自らに問いかけることもあります。

しかし、時間がたつとまた同じ人生の繰り返しをしている自分に気づかされます。あらためて自らの残りの人生も同じようなことを繰り返しながら、この娑婆を去っていくのだろうと漠然と思うことです。

ある意味『生きるために生きている。』そのような感覚を覚えることがあります。人の人生とは、哀しいものかもしれません。このような人生を歩まざるおえない人間の哀しい宿命の中を生きていく存在だと自らを鑑み考えることです。

しかしながら、親鸞聖人のご和讃に『本願力に遇いぬれば、むなしくすぐる人ぞなき』という句があります。物心ついた頃から変わりなく、日々目の前のものに一喜一憂・翻弄されながら、哀しくもむなしい人生で終わりを迎えようとしている私ですが、全てのご縁を私なりに意味あるもの、

仏道への糧にできたらと願うことです。(次号に続きます。)